

『逍遙遺稿』札記

——高橋白山・月山父子のこと他——

○中野逍遙と高橋白山・月山父子のこと

明治二十年代、世を憂う熱き思いを抱きつつ報われぬ恋に身を焦し、激しい思慕の情を切々と詠じた特異な漢詩人として明治浪漫文学史にその名を留む文学士中野逍遙は、生前、帝国大学文科大学の一部の師友にその漢詩文の才を認められてはいたものの、世間的には全く無名の存在であり、当時の漢詩壇ともほとんど交渉がなかった。そのためか、明治二十八年十一月十六日、彼の一周忌に友人たちの奔走尽力により刊行された『逍遙遺稿』正外二編について、これを高く評価したのは大町桂月や田岡嶺雲ら同世代の赤門周辺の青年に過ぎず、逍遙の恋愛詩から大きな衝撃を受けたのは年若い島崎藤村であって、専門の漢詩人の間からは格別これといった反響は起こらなかった。

ただ、そうではあっても、逍遙の在世中に彼の詩才に驚き将来を期待した漢学者がいなかった。これまでも指摘されて

二 宮 俊 博

いるように、^(注1) 信州の高橋白山<sup>(天保七〜明治三七
一八三六〜一九〇四)</sup>がその人である。

白山は、通称を敬十郎(名は利貞、字は子和)といい、旧高遠藩の儒者であつた人である。十六歳の時、藩校進徳館の助教に擢んでられ、十三年間で館の蔵書三万巻をほぼ涉獵したという。維新後は教部省の招きを断わり、私塾の教師をしていたが、やがて長野・新潟で師範学校や中学校の教諭となり、明治十九年から三十二年まで長野師範学校にあつて人材の育成に努めた。明治三十年、白山六十二歳の時に建てられた「白山高橋先生寿藏之碑」は、仙台出身の岡鹿門(名は千仞。<sup>天保四〜大正三
一八三三〜一九一四</sup>)の撰になるものだが、それに拠れば、白山は文久年間二十七・八歳の頃、江戸に出て藤森天山(名は大雅。<sup>寛政十一〜文久二
一七九八〜一八六二</sup>)の門に入り、^(注2) 鷺津毅堂(名は宣光。<sup>文政二五〜明治八十三
一八二五〜一九一五</sup>)や大沼枕山(名は厚。<sup>文化十五〜明治二四
一八一五〜一八九九</sup>)らと交際したとのことである。また、その文章は欧陽修を主として学び、それに三蘇(蘇洵・蘇軾・蘇轍)の論策からも得る所があり、詩は杜甫と陸游を宗としたという。著作には『白山楼詩文鈔』八卷(明治十六年刊)『征清詩史』(三十年)『白山楼詩文鈔』卷之上(三十二年)『白山文集』(三十五年)『経

子史千絶』(四十三年)『白山詩集』(全上)などがある。^(註8)

この白山の長子が、中野逍遙の数少ない友人のひとり高橋作衛であつた。月山と号した彼は逍遙と同じ慶応三年(逍遙は二月、作衛は十月)に高遠で生まれ、明治二十七年七月に法科大学政治学科を卒業。高等中学を出たのは逍遙より一年遅いが大学では同期となつた。その後、日清戦役が起るや海軍大学校教授に任ぜられ伊東祐亨連合艦隊司令長官の国際法顧問としてその幕にあり、文才を買われ北洋水師提督丁汝昌への降伏勧告文起草した。日露戦争前夜には帝大七博士の一人として政府の弱腰を詰り強硬に開戦論を唱えた。大正四年には漢詩文の会、雅文会を創設し「大正詩文」を主宰発行。九年九月五十四才で歿した。その漢詩文集に十一年刊の『月山遺稿』上下二巻がある。

逍遙との交友については、「逍遙遺稿の後に書す」「逍遙遺稿」雑録所収。『月山遺稿』では「逍遙遺稿跋」と改む」と題する追悼文に、高等中学の時分から逍遙の名を聞き知つてはいたものの交際はなく、大学に入つて後、ある日逍遙が彼のもとを訪ねて来、一見旧の如く親しくなつたのだと述べている。作衛の一級下の法律学科には逍遙の母方の従弟穂積巖夫がおり、巖夫の叔父穂積重・八束の兄弟は共に法科大学で教鞭を執つていたから、あるいは穂積家の人々を通して逍遙が作衛のことを耳にする機会があつたのかも知れない。更に彼は幼時より父白山に就いて詩文を学び、^(註9)高等中学や法科大学在学中に学生を代表して何篇かの文章を書いてゐる所から、漢文が出来る男だと認めた上での逍遙の訪問であつたと思われる。やがて互いに往き來し酒を酌み交わすようになり、明治二十六年七月には房総旅行中二人が偶然出会つたこともあつたし、その後、逍遙は自らの詩稿を示して作衛の批評を求めるようになった。^(註10)

信州に引き籠つていた高橋白山が文科大学の学生中野逍遙の名を知るに至つたのは、この作衛を通じてである。わが子の教育に熱心でその大成を願う父親にとつて、息子の交友關係は氣に懸かるものであろう。その点から言つと、作衛から明治の新時代に漢学を専攻し一家の見識を有する人物だと聞かされれば、好ましく思わぬはずがない。そして、作衛のもとに寄せられた逍遙の詩を実際に見て、その世を憂え斯文の類唐を嘆く逍遙の心情に感じ、その志を壮としてこれを励ましたのであつた。このノートでは、逍遙と月山とが応酬し白山が唱和した各々の詩篇について簡単な語釈を附して紹介してみたいと思う。

まずは、中野逍遙の「新春感を書して、信州高橋月山子に寄す。長篇一首」(『逍遙遺稿』外編)から。これは、明治二十七年正月、前年秋頃より体の不調に悩まされていた逍遙が、「纔かに靈泉に因つて、以て骨髓の病を醫さん」として伊豆に遊び、熱海に逗留した時の作である。^(註11)

- | | |
|------------|--------------------|
| 1 娶妻當如陰麗華 | 妻を娶らば當に陰麗華の如かるべく |
| 2 生子願似孫仲謀 | 子を生まば願はくは孫仲謀に似んことを |
| 3 威卿馬齒二十七 | 威卿 馬齒二十七 |
| 4 知昔諸葛出南陽 | 知る昔 諸葛 南陽を出づるを |
| 5 十歲風雪耗短褐 | 十歳の風雪 短褐を耗し |
| 6 旅食徒使客魂傷 | 旅食 徒らに客魂をして傷ましむ |
| 7 韓愈學術空達世 | 韓愈の學術 空しく世に達ひ |
| 8 賈誼才調足招殃 | 賈誼の才調 殃を招くに足る |
| 9 墨池染老一枝筆 | 墨池 老を染む一枝の筆 |
| 10 何日文章薦玉皇 | 何れの日に文章をば玉皇に薦めん |

11 寸葵猶餘丹々心
12 捧向紫微拂廟堂
13 對人不訴不平事
14 只悲屈原沈江滄
15 向人不說銷魂種
16 只憐杜牧負春芳
17 人生五十已過半
18 曠達贏得一代狂
19 宮檻不流朱雲血
20 却喜明時聖德煌
21 蓬芥微臣浴雨露
22 寒艸猶知日月光
23 閑窓讀書又何幸
24 回頭文海波汪々
25 李杜登天詩流絕
26 程朱去世學脉荒
27 英傑之出當有時
28 誰荷大任在扶桑
29 蒼海老伯千古器
30 氣骨稜々傲秋霜
31 詩抵楚經貫秦漢
32 文帶莊荀之奇香
33 篁村先生一代儒
34 博識求比海內亡
35 道踐洛閭之正派
36 學叩二酉之所藏

寸葵 猶は餘す丹々の心
捧げて紫微に向つて廟堂を払ふ
人に対して訴へず不平の事
只だ悲しむ屈原の江滄に沈むを
人に向つて説かず銷魂の種
只だ憐れむ杜牧の春芳に負くを
人生五十 已に半ばを過ぎ
曠達贏ち得たり一代の狂
宮檻流さず 朱雲の血
却つて喜ぶ 明時聖德の煌くを
蓬芥の微臣 雨露に浴し
寒草 猶ほ知る日月の光
閑窓書を読む又た何の幸ぞ
頭を回らせば文海 波汪々
李杜 天に登つて詩流絶え
程朱 世を去つて學脉荒ぶ
英傑の出づる當に時有るべし
誰か大任を荷つて扶桑に在る
蒼海老伯は千古の器
氣骨稜々 秋霜に傲る
詩は楚に抵り経は秦漢を貫き
文は莊荀の奇香を帶ぶ
篁村先生は一代の儒
博識 比を求むるも海内に亡し
道は洛閭の正派を踐み
学は二酉の蔵する所を叩く

37 詩宗學伯除二人
38 紛々諸子如蚊虻
39 小言詹々才是銜
40 不是幫間即優倡
41 怪槐南又妖寧齋
42 惑亂詩道汗文場
43 我際盛世膺奎運
44 竊嘆斯文之頹唐
45 抱負雖包八表外
46 退潮其奈獨力擎
47 憶着信南月山子
48 愛君傾盖友思長
49 文章略知家學素
50 風裁似學唐陸郎
51 去年七月房南游
52 把手分手何太忙
53 離合過眼縱無定
54 交誼纏心莫變常
55 與君跋涉確氷麓
56 與君徜徉諏訪傍
57 百年感慨寄玉壺
58 放吟撼天破愁腸
59 此時當有詩千首
60 許否豪飲罄萬觴
61 決皆北望三十里
62 路遠安致金錯囊

詩宗學伯 二人を除けば
紛々たる諸子 蚊虻の如し
小言詹々 才是れ銜ふ
是れ幫間ならずんば即ち優倡
怪槐南又た妖寧齋
詩道を惑亂し文場を汗す
我れ盛世に際し奎運に膺り
窃かに斯文の頹唐を嘆ず
抱負 八表の外を包むと雖も
退潮其れ独力にて擎むるを奈にせん
憶着す 信南の月山子
愛す君が傾盖友思長きを
文章 略ぼ知る家學の素
風裁 學ぶに似たり唐陸郎
去年七月 房南の游
手を把り手を分かつ何ぞ太だ忙しき
離合過眼 縦ひ定め無きも
交誼心に纏ひて常に變はる莫し
君と跋涉せん確氷の麓
君と徜徉せん諏訪の傍
百年の感慨 玉壺に寄せ
放吟 天を撼がして愁腸を破る
此の時當に詩千首有るべし
許すや否や 豪飲 万觴を罄すことを
皆を決して北望す三十里
路遠くして安んぞ金錯囊を致さん

63 風光思君君不見 風光 君を思へども君見えず
64 鶴唳引夢入彼蒼 鶴唳 夢を引いて彼蒼に入る

(◎は韻字。下平声陽韻)

○陰麗華 後漢・光武帝(劉秀)の皇后。劉秀がまだ世に出ぬ前、「宦に仕はば當に執金吾と作るべし、妻を娶らば當に陰麗華を得べし」と願ったという(『後漢書』皇后紀)。○孫仲謀 三国・呉の孫権のこと。仲謀はその字。魏の曹操がかつてその陣容をみて「子を生まば當に孫仲謀の如くなるべし」と嘆じた(『三国志』呉主伝注に引く晋・胡冲『呉曆』)。○威卿 中野道遙の字。○諸葛 諸葛亮孔明のこと。南陽(今の湖北省襄陽の西)の地に隱棲躬耕していたのを劉備が三顧の礼で迎え入れた。時に孔明二十七歳。○十歳 道遙が伊予宇和島から十七歳で上京してよりちょうど十年。○短褐 丈の短い粗末な着物。ここでは、貧乏書生の衣服。○韓愈 中唐の文豪。唐宋八大家の一人。六朝以来の美文を排し古文の復興を唱え、儒学を尊崇した。「仏骨を論ずる表」により憲宗の怒りを買って潮州に貶謫されたこともある。○賈誼 前漢の文学者。年若くして文帝に仕えたが、周囲の嫉視中傷にあい長沙に左遷された。「屈原を弔ふ賦」「鵩鳥の賦」などがある。○墨池云々 この一句は、勉学のために青春を費したことをいう。墨池は、硯の水をためる窪んだ所。○玉皇 道教で天帝のこと。ここでは天皇。○寸莖 背の低い向日葵。ひまわりの花は太陽の方に傾くことから、天子の徳を慕う臣下の喩。○丹々心 まごころ。赤誠。○紫微 天帝の居所を護衛しているとされる星の名。転じて皇居、宮城の意。○廟堂 朝廷、政府。○屈原 戦国、楚の大夫。讒言されて楚王に容れられず、汨羅に身を投じたという。わが身の高潔なるを訴え失意と悲憤の念を綴々詠じた作品は『楚辭』に収められ、後世悲運逆境に泣く詩人や文人の精神的支柱となった。司馬遷の『史記』には賈誼と合わせて「屈原賈生列伝」が立てられている。○江滄 あおおとした川。滄江と同じ。韻を踏む都合でかくいう。○銷魂種 ここで恋の悩み。南条貞子への思いをいう。○杜牧 晩唐の詩人。かつて見染めた少女がいたが、約束の期限を過ぎて会うと既に人妻となっ

ていて「緑葉の嘆」を発したという逸話がある。拙稿『道遙遺稿』札記「才子佳人小説との関わりをめぐって」(『相山女学園大学研究論集』第十八号、一九八七)参照。○人生五十年 中国では人生百年。ちなみに、夏目漱石も明治二十八年五月作の「無題」五首其三に「人間五十年半ばを過ぎ、愧づらくは読書の為に一生を誤るを」と詠じている。○曠達 大まかで物事にこだわらない。豁達。○贏得 他のことは身に付かずこれだけが残ったという意を示す。○一代狂 当代きつての狂痴。世間の思惑など関係なく向こう見ずに突走るのが狂者。○宮檻云々 朱雲は前漢の人。成帝がその直言に怒り、御史に命じて御殿から引きずりおろさせようとした際、檻にしがみついて抵抗したため檻が折れたが、辛慶忌がその罪をゆるすよう血を流すまで叩頭したので、成帝の怒りもとけたという(『漢書』朱雲伝)。「蒙求」にも朱雲折檻の条がある。○蓬芥 よもぎやあくた。つまらぬものの喩。○雨露 天子の恩沢をいう。下文の「日月光」も同じ。○文海 文学の世界。文壇。○波汪々 一面に波立つさま。○李杜 盛唐の大詩人、李白と杜甫。○程朱 北宋の二程子(程顥、程頤)と南宋の朱熹。性理学を唱え、旧来の訓詁中心の儒学の面目を一新し、新たな形而上学を確立した。○扶桑 中国の東方、日出づる辺の海中にあるとされた神木。転じてわが国の称。○蒼海老伯 副島種臣(『蒼海』)のこと。蒼海はその号。明治十七年伯爵を授けられ、この当時は樞密顧問官。○千古器 長く後世まで讃えられる大器、傑材。○稜々 高く聳えあつてゐるが如くである。○莊荀 莊子、荀子。○墓村 島田重礼(『天保三』、明治三)の号。当時、帝国大学文科大學漢学科教授。道遙が師事した。○洛閩 程朱の学をいう。二程子は洛陽の人であり、朱子は閩(福建省の古称)の地で学を講じたことによる。○西酉 湖南省にある大西・小西の二山。小西山の洞穴に秦人が古書千巻を隠したという伝説から蔵書の多いことをいう。○小言詹々 つまらぬことを口やかましいう。○莊子 齊物論篇に「大言は炎炎(淡淡と同じ)たり、小言は詹詹たり」と。○槐南 森槐南(『文芸』、明治四二)のこと。○寧齋 野口寧齋(『寧齋』、明治三三)のこと。○奎運 文運。奎

は二十八宿の一つで文章を司る星。○斯文 儒家の文学伝統。○八表外 八方の果て。全世界。○憶着 着は状態の持続を示す助字。○傾蓋^{（一）} 一見して親しく交わる。孔子と程子とが路上で出会い、互いに車の蓋^{（二）}（蓋は俗字）を傾けて親しく語り合った故事（『孔子家語』致思篇）による。○風裁 品格・態度。○唐陸郎 中唐の陸贄のこと。徳宗朝の賢宰相として知られ、その「陸宣公奏議」は天子に奉る意見書の模範とされた。○房南 房総半島の南部。○過眼 あつという間に。○跛躄 踏み越えてゆく。○徜徉 徘徊。○百年感慨 人生の感慨。○玉壺 玉製の酒壺。酒壺の美称。王昌齡の「芙蓉楼にて辛漸を送る」詩に「一片の冰心玉壺に在り」。○愁腸 愁え悲しむ心。○万觴 觴はさかづき。○決皆 まなじりも裂けんばかりに眼を見開く。杜甫の「望岳」詩に「皆を決して帰鳥入る」と。○三十里 漠然とその距離をいつたもの。実数ではなからう。○金錯囊 金錯刀（刀の形をした錢。一部に鍍金がしてある。一説につかを黄金で飾った刀）を入れた袋の意か。後漢・張衡の「四愁詩」（『文選』）に「美人我に贈る金錯刀」とあるのを踏まえた表現。もつとも、ここでは錦囊、つまり逍遙の詩篇を指すのであろう。○鶴唳 鶴の鳴き声。○彼蒼 天のこと。『詩経』秦風・黃鳥の「彼の蒼たる者は天」に基く語。

この詩は全部で六十四句に及ぶ一韻到底格の七言古詩で一気呵成に書き上げられたものであろう。ただし、二句目は韻を踏み落している。その内容は、国家の文運隆盛に寄与すべく世に立たんことを願う逍遙の心情が吐露されたものであるが、その中で注目されるのは、学界や漢詩壇の現状について、副島蒼海を（詩宗、島田篁村を（学伯）として高く評価する一方、森槐南・野口寧斎を（怪）（妖）と痛烈に非難している点である。篁村・蒼海に対しては同じ頃に書かれた「豆州漫筆」（正編）に於ても「篁村先生世に在れば、未だ必ずしも望を学海に絶たず」と期待を寄せ、蒼海を「悲憤に泣く」詩人として取り上げている。

直接教えを受けた篁村とは違い、老伯蒼海には恐らく相まみえる機会を持たなかったと思われるけれども、漢魏の蒼古雄勁な調べがあることとされたその詩風や高潔無私・豪邁闊達と評されるその人となり逍遙は景仰していたのであろう。平生の逍遙をよく知る宮本正貫は「蓋し君の志す所、文は則ち秦漢を降らず、詩も亦た漢魏を下らず」（『亡友中野君の遺稿の後に書す』、「逍遙遺稿」雑録所収）と伝えているが、それを体現しているとみられたのが蒼海であった。これに対して槐南やその弟分寧斎は星社を代表する詩人として当時華やかな存在ではあったが、詞藻の豊かさ修辭の巧さでは他の追隨を許さなかったものの、その詩は氣骨に乏しく田岡嶺雲のいう（狂熱）に缺けていた。逍遙からみれば、さして年も違わぬ二人の活躍ぶりは徒らに才を銜うばかりで、政府高官に取り入りながら宴席に侍る幫間か役者風情の如くに思われて、己れ自身はまだ世に出て驥足を展ばず状況にないだけに、余計に苦々しく忌々しく感じられたに違いない。高橋作衛につねづね「現今の文壇儻越多し。何れの時にか能く平生の志を成し、而して麗華蘭草、顛倒相尚ぶの弊を一掃せん。唯だ恨むらくは時機未だ至らず、之を思ふも益無し、学ぶに如かざるのみ」と語っていたという。

なお、後年のことになるが、逍遙の心友であった佐佐木信綱は、ある文人の集まりの席上、隣にいた槐南が「中野逍遙といふ人は貴下の親友であると聞いてをるが、逍遙遺稿の中に『怪槐南矣妄寧斎』といふ句がある。その怪と妄とがここに並んでをる」と言って高笑し、寧斎の方は苦笑していた、というエピソードを記している。

さて、これまで逍遙の高橋作衛に寄せた詩をみてきたが、次にそれに和した月山の作を挙げておこう。「明治甲午正月詞契中野威卿、

熱海に在りて長古一篇を寄せらる。因つて其の韻に和す」と題する詩がそれである。『逍遙遺稿』雑録に載せられたものと『月山遺稿』とでは多少異同があるが、ここでは後者を示すこととする。

- 1 唱而和兮唯威卿
 - 2 羨君百里雁隨陽
 - 3 幸有音書容易達
 - 4 旬月別離復奚傷
 - 5 我對信山千疊雪
 - 6 君臨熱海萬里洋
 - 7 驚見君詩有神助
 - 8 筆端依舊多餘芳
 - 9 憶起去年鋸山下
 - 10 置酒高談意欲狂
 - 11 共祝此身逢盛世
 - 12 聖明天子威德煌
 - 13 願薦穆如清風頌
 - 14 揚勵欲添偉績光
 - 15 願將一瀉千里筆
 - 16 萬言詞賦致汪々
 - 17 只嘆仁義久不講
 - 18 五經掃地廉耻荒
 - 19 漫說成都八百桑
 - 20 不見三徑菊傲霜
 - 21 今代英傑方老矣
 - 22 雨後老梅無餘香
 - 23 君愛文林事漸非
- 唱して和すは唯だ威卿
君を羨む百里 雁 陽に随ふを
幸ひに音書有り容易に達す
旬月の別離 復た奚んぞ傷まん
我は対す信山千疊の雪
君は臨む熱海萬里の洋
驚きて見る君が詩に神助有るを
筆端 旧に依つて餘芳多し
憶ひ起こす去年 鋸山の下
置酒高談 意狂せんと欲す
共に祝す此の身 盛世に逢ふを
聖明の天子 威徳煌く
願はくは穆如清風の頌を薦め
揚勵 偉績の光を添へんと欲す
願はくは一瀉千里の筆を將つて
萬言の詞賦 汪々を致さん
只だ嘆ず仁義久しく講ぜられざるを
五經 地を掃つて廉恥荒む
漫りに説く成都八百桑
見ず三徑 菊 霜に傲るを
今代英傑 方に老いたり
雨後老梅 餘香無し
君は愛ふ文林 事漸く非なるを

- 24 天下宿耆追年亡
 - 25 我嘆世路甚艱難
 - 26 狡兔未死良弓藏
 - 27 祝鮀俟與宋朝美
 - 28 群小得志巧翱翔
 - 29 儒流只見章句師
 - 30 詞人所賦類優倡
 - 31 悲歌慷慨志相投
 - 32 我清政海君文場
 - 33 吾黨所期如斯耳
 - 34 前程一往萬里長
 - 35 文章只應凌漢代
 - 36 功名又何說周郎
 - 37 青衿自有苦中樂
 - 38 黃卷却成閑裏忙
 - 39 君筆倏忽役雷霆
 - 40 風流却守徐公常
 - 41 我胸每抱濟世念
 - 42 因循豈屑鄭子鄉
 - 43 時未到兮深韜晦
 - 44 屠蘇隨例迎東皇
 - 45 何日能成平生志
 - 46 一樽笑對山水蒼
- 天下の宿耆 年を追つて亡す
我は嘆ず世路甚だ艱難なるを
狡兔未だ死せずして良弓藏さる
祝鮀の俟と宋朝の美と
群小 志を得て巧みに翱翔す
儒流 只だ章句の師を見るのみ
詞人の賦する所 優倡に類す
悲歌慷慨 志相投じ
我は政海を清まさん君は文場
吾が党の期する所 斯くの如きのみ
前程一往 萬里長し
文章只だ応に漢代を凌ぐべし
功名又た何ぞ周郎を説かん
青衿自ら苦中の樂有り
黃卷却つて閑裏の忙を成す
君が筆 倏忽として雷霆を役し
風流却つて守る徐公の常
我が胸毎に濟世の念を抱き
因循豈に屑しとせんや鄭子の郷
時未だ到らずして深く韜晦し
屠蘇 例に随つて東皇を迎ふ
何れの日にか能く平生の志を成し
一樽 笑つて対さん山水の蒼
- 号 口調を整える助字。『楚辭』系の作品にみえる。但し、訓読ではよまない。○百里 漠然とその遠さをいっただもの。実数ではなからう。○隨陽 太陽の後を追いかける。『尚書』禹貢の伝に「隨

陽の鳥は鴻雁の属」と。○旬月 一ヶ月。あるいは十日から一ヶ月。○神助 鬼神の助け。杜甫の「修覺寺に遊ぶ」詩に「詩応に神助有るなるべし、吾れ春遊に及ぶことを得たり」と。○鋸山 房総半島南西部にある山。標高三二九メートル。○置酒高飲 酒を飲み大いに語りあう。○意欲狂 心が高揚し狂おしい気分になる。○穆如清風頌『詩経』大雅・蒸民に「吉甫 誦を作る、穆として清風の如し」とある。穆はやわらかく意。この詩は、周の宣王の時、尹吉甫が宰相仲山甫の賢徳を頌して作ったもの。ここでは、今上の威徳をたたえる頌詩のこと。○揚励 高く宣揚する。韓愈の「潮州刺史の上に謝する表」に「無前の偉蹟を揚厲す」と。厲は励と同じ。○一瀉千里筆 江河の水が一気に千里も流れ下るごとく奔放な筆力をいう。※『逍遙遺稿』雑録では、第十四・十五句、揚励以下十四字を缺く。○汪洋 氣勢広大なさま。○五経掃地 聖人の教えがすたれて行なわれないこと。『新唐書』祝欽明伝に、儒者の祝欽明が中宗の前で滑稽な舞を見せ、盧藏用が「是れ五経を挙げて地を掃へり」と嘆じたことある。『書言故事』卷六、評論類、掃地の条及び『十八史略』にも見える。五経は易経・尚書・詩経・礼記・春秋左氏伝。○廉恥 清廉で恥を知る心。○漫 やたらと、むやみに。○成都八百桑 諸葛亮の後主劉禪への上表に「成都に桑八百株、薄田十五頃有り。子弟の衣食、自ら餘饒有り」とある。『三国志』諸葛亮伝。※『逍遙遺稿』雑録では、桑字を株に作る。○三径 前漢の蔣詡が庭に三本の小道を作った故事から、隠者の住まいをいう。晋・陶潜の「帰去来の辞」に「三径荒に就いて松菊猶ほ存せり」と。○菊傲霜 霜の寒さに屈せず菊花が咲き誇る。第十九・二十句は世上の人々は子孫に良田を残さないとばかり考えて、清貧に甘んじて毅然たる生き方を貫く者がいない、という意。○文林 漢詩壇。○宿耆 老大家。○狡兔未死良弓藏『史記』越世家に「蜚鳥尽きて良弓藏され、狡兔死して良狗烹らる」と。蜚は飛の古字。狡兔はすばらしい兎。ここで具体的に何を指すか不明。○祝鮀云々『論語』雍也篇に「子曰く、祝鮀が佞有って宋朝が美有らずんば、難いかな今の世に免れんことを」とある。祝鮀は春秋、衛の祭祀官（祝）。鮀はその名。佞は弁舌の才。宋朝は宋の公子。美貌で有名。朱注に

「言ふところは衰世諷を好み色を悦ぶ。此れに非ずんば免れ難し。蓋し之を傷むなり」と解する。○翺翔 飛び回る。○章句師 經書の訓詁に終始し儒教の根本精神を理解しない学者。○詞人 詩人。○悲歌慷慨 感情が激して悲壮に歌い、世を憤り嘆く。○志相投 志向がぴったりあう。投は合の意。○政海 政治の世界。○前程 前途。前程万里は前途洋々の意。○周郎 三国・呉の名将、周瑜のこと。赤壁で曹操の大軍を破った。○青衿『詩経』鄭風・子衿の「青衿たる子の衿、悠悠たる我が心」より出た語。書生をいう。○黄卷 書物。虫食を防ぐための黄檗の汁で染めた紙を用いたからいう。○條然 たちまち。條は條の俗字。○雷霆 いかづち。○徐公常 徐公は三国・魏の徐邈のこと。流行の変化に心動かされることなく平生の態度を改めなかった。『三国志』徐邈伝。○濟世 世を救う。○因循 前例を踏襲するのみで改革の氣概に乏しいこと。○鄭子鄉 後漢の孔融が大儒鄭玄を顕彰するためにその出身地に鄭公郷を置いた故事。『後漢書』鄭玄伝を踏まえるか。なお、『書言故事』卷十一、郡邑類に鄭郷の条がある。たんなる漢学者として郷里に埋もれたまま終りたくないという思いを述べているのであろう。※『逍遙遺稿』雑録では、郷字を卿に作る。○東皇 春をつかさどる神。

このような逍遙と月山との詩の応酬を見て、逍遙を高く評価したのが、前述したように高橋白山であった。「逍遙子、鋸山の途次、児作衛と語る、甚だ奇。故に詩中多く其の言を用ふ」と自注を附した「南豫逍遙子に贈る。以て答書に代ふ」と題された詩が『白山樓詩文鈔』卷之上及び『白山詩集』卷二に収められている。（圈批点は省略）

- | | |
|-----------|---------------|
| 1 夷齊執義餓首陽 | 夷齊は義を執りて首陽に餓し |
| 2 盜跖積惡能壽康 | 盜跖は惡を積みて能く壽康 |
| 3 顏回篤學在陋巷 | 顏回は篤學にして陋巷に在り |
| 4 糟糠不飫身蚤亡 | 糟糠飫せず身蚤に亡す |
| 5 暴戾恣睢極逸樂 | 暴戾恣睢 逸樂を極め |

- 6 累徳潔行罹禍殃。
- 7 久怪人事報施倒。
- 8 不信天道祐善良。
- 9 從古修徳從所好。
- 10 自己得喪總相忘。
- 11 孟軻獨述三代道。
- 12 仲尼爲裁吾黨狂。
- 13 當日指斥笑迂闊。
- 14 大道昭々千古煌。
- 15 呂望起應非熊兆。
- 16 牧野會師武惟揚。
- 17 屈原憂愁作離騷。
- 18 文章與日月並光。
- 19 感激流涕武侯表。
- 20 餘産唯有南陽桑。
- 21 岫雲倦鳥陶令辭。
- 22 掛冠去就三徑荒。
- 23 仁人君子豪傑士。
- 24 出處不苟其義當。
- 25 不怨天又不尤人。
- 26 用之則行舍則藏。
- 27 進正衣冠贊化育。
- 28 操持權柄坐廟堂。
- 29 退耕於野釣於水。
- 30 著作傳道存綱常。
- 31 大丈夫於此二者。

累徳潔行 禍殃に罹る
 久しく怪しむ人事報施倒するを
 信ぜず天道 善良を祐くるを
 古從り徳を修めて好む所に從ひ
 自己の得喪は総べて相忘る
 孟軻独り三代の道を述べ
 仲尼爲に吾が党の狂を裁つ
 當日 指斥して迂闊を笑ふも
 大道昭々として千古煌々
 呂望は起ちて非熊の兆に応じ
 牧野 師を会して武惟れ揚ぐ
 屈原は憂愁して離騷を作り
 文章 日月と光を並ぶ
 感激流涕す武侯の表
 餘産 唯だ南陽の桑有るのみ
 岫雲倦鳥は陶令の辭
 冠を掛け 去りて三徑の荒に就く
 仁人君子豪傑の士
 出處 苟くもせず其の義當る
 天を怨まず又た人を尤めず
 之を用ふれば則ち行なひ舍つれば則ち藏る
 進んでは衣冠を正して化育を賛け
 權柄を操持して廟堂に坐す
 退きては野に耕し水に釣し
 著作 道を伝へて綱常を存す
 大丈夫は此の二者に於いて

- 32 必有一得復奚傷。
- 33 道體自有本源在。
- 34 乾坤一氣盈沆々。
- 35 天下至言出道體。
- 36 道體源深文氣昌。
- 37 誦習經史互醒發。
- 38 搜究古今相斟量。
- 39 點撥疎密字妥帖。
- 40 節奏短長韻鏗鏘。
- 41 伴隨李杜共上下。
- 42 追逐賈董參翱翔。
- 43 韓吏部能自樹立。
- 44 力回倒瀾道剛方。
- 45 今人漫誇彫蟲技。
- 46 爭樹旗鼓翰墨場。
- 47 瓦釜雷鳴黃鐘毀。
- 48 玄文幽處爲不章。
- 49 誰歌大雅頌盛徳。
- 50 感慨憂道嘆喟長。
- 51 走避都門熱鬧地。
- 52 晨伴樵者昏漁郎。
- 53 鋸山偶與我兒語。
- 54 駐車共忘行旅忙。
- 55 立談之間瀉心膽。
- 56 發言風義盛激昂。
- 57 今茲甲午鳳曆改。

必ず一得有り復た奚ぞ傷まん
 道体自ら本源の在る有り
 乾坤一氣 盈ちて沆々
 天下の至言は道体より出づ
 道体源深くして文氣昌んなり
 經史を誦習して互いに醒発し
 古今を搜究して相斟量す
 點撥疎密 字妥帖
 節奏短長 韻鏗鏘
 李杜に伴隨して共に上下し
 賈董を追逐して參はつて翱翔す
 韓吏部能く自ら樹立し
 力 倒瀾を回らして道 剛方
 今人 漫りに彫蟲の技を誇り
 争つて旗鼓を翰墨の場に樹つ
 瓦釜雷鳴して黃鐘毀ち
 玄文幽なる処 章かならずと爲す
 誰か大雅を歌ひて盛徳を頌さん
 感慨 道を憂ひて嘆喟長し
 走りて避く都門熱鬧の地
 晨には樵者に伴ひ昏には漁郎
 鋸山に偶たま我が兒と語り
 車を駐めて共に行旅の忙を忘る
 立談の間 心胆を瀉ぎ
 言を發して風義 盛んに激昂す
 今茲甲午 鳳曆改まり

58 兄也賀正歸故郷。

兄や正を賀して 故郷に帰る

59 一坐團欒勸杯處。

一坐團欒 杯を勧むる処

60 書簡寄來叙吉祥。

書簡寄せ來つて吉祥を叙す

61 欲作謝詞繫雁足。

謝詞を作りて雁足に繫がんと欲すれば

62 萬峯戴雪摩穹蒼。

萬峯 雪を戴いて穹蒼を摩す

○夷齊 伯夷叔齊。周の武王が殷の紂王を伐つのを諫めて聞き入れられず、首陽山に隠れて餓死したという。『史記』に伯夷列伝があり、以下第八句までその記述に基く表現。なお、『史記』の引用は評林本による。○盜跖云々 盜跖は盜賊の名。盜跖とも書く。寿康は元氣で長生き。伯夷伝に「盜跖は不幸を殺し、人の肉を肝に、暴戾恣睢、党を聚むること数千人、天下に横行せしが、竟に寿を以て終れり」と。○顔回 字は子淵。孔子の愛弟子。『論語』雍也篇に学を好んだことがみえ、「簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り」とその貧しい暮らしが描かれている。陋巷は狭い路次裏。陋は陋の本字。○糟糠云々 伯夷伝に「比十子の徒、仲尼独り顔淵を薦め、学を好むと為す。然れども回や屢しば空しく、糟糠にも厭かず、而して卒に蚤天せり」と。仲尼は孔子の名。糟糠は酒かす米ぬか。粗末な食事をいう。厭は厭と同じく、飽の意。蚤は早と同じ。○暴戾恣睢 兇暴で道理にもとりわがまま勝手。○逸楽 伯夷伝に「専ら忌諱を犯し、而して終身逸楽す」と。○人事 人間社会の事柄。○報施 善行に報い幸福を授けること。伯夷伝に「天の善人に報施する、其れ如何ぞや」と。○天道云々 司馬遷は、伯夷叔齊が義を守つて首陽山に餓死し、德行を称された顔回が早逝したのに対し、盜跖がぬくぬくと天寿を全うした不条理を、「天道は是非か」と痛烈に問いかけている。○從所好 『論語』述而篇に「富にして求む可くんば、執鞭の士と雖も亦た之を為さん。如し求む可からずんば、吾が好む所に從はん」と。○得喪 得失。利害損得。○孟軻云々 孟軻は孟子のこと。軻はその名。三代は夏・殷・周。『史記』孟軻卿列伝に「天下方に合従連衡に務め、攻伐を以て賢と為す。而るに孟軻は乃ち唐虞三代の徳を述ぶ」と。○仲尼云々 『論語』公冶長篇に「吾が党の小子、狂簡にして斐然として章を成す。之を

裁する所以を知らず」と。志ばかり大きくて実行が伴わないのが狂簡。斐然はややのあるさま。うるわしい資質に恵まれているがむやみに大きなことをいうばかりでそれを活用できずにいる郷里の若者を教育したい、という意。○當日 当時。○大道 孔孟の道。○昭昭 明らかさま。○呂望云々 呂望は周の文王の賢臣、呂尚のこと。文王がある時、獵に出かける際「獲る所は龍に非ず影に非ず、虎に非ず熊に非ず、獲る所は霸王の輔なり」との占いが出て、渭水の岸で釣りをしていた呂尚を見出し、これぞわが太公（祖父）が待ち望んでいた人物だと喜んで太公望と呼んだという。後、呂尚は武王を佐けて殷を亡ぼした功により齊に封ぜられた（『史記』齊太公世家）。なお、『蒙求』にも「呂望非熊」の条がある。○牧野 周の武王が殷の紂王を破つた地。今の河南省淇県の南。○武惟揚 武威を發揚すること。『尚書』泰誓に「我が武惟れ揚がり之が疆を侵し」云々とある。惟は強調の助字。○屈原云々 『史記』屈原賈生列伝に「故に憂愁幽思して離騷を作る」と。○文章云々 同じく屈原伝に離騷について「此の志を推せば、日月と光を争ふと雖も可なり」と最大級の賛辞を呈している。○武侯 諸葛亮の諡。その「出師の表」は有名。○餘産云々 餘産は遺産。ここに南陽というのは、成都の誤りであろう。月山詩「成都八百桑」の語釈参照。○岫雲倦鳥 晋・陶潜の「帰去來の辭」に「雲は無心にして以て岫を出で、鳥は飛ぶことに倦んで而して還るを知る」と。岫は山のほら穴。○陶令 陶潜のこと。かつて彭沢県令となつたのでかくいう。○掛冠云々 掛冠は官職を辞すること。陶潜は彭沢県令となつたが八十余日でこれを罷め歸隱した。その際作られたのが「帰去來の辭」で、その中に「三徑荒に就いて松菊猶ほ存せり」とある。○不怨天云々 『論語』憲問篇に「子曰く、天を怨まず、人を尤めず」と。○用之云々 『論語』述而篇に「之を用ふれば則ち行なひ、之を舍つれば則ち蔵る」と。己れを用いてくれる者があれば世に出てその抱負を実行し、なければじつと隠れて機会を俟つ。○化育 『中庸』に「天地の化育を賛く」と。ここでは人々の教化育成。○綱常 人の守るべき大道。三綱五常（君臣父子夫婦の道と仁義礼智信）。○道体 道の本体。○乾坤一氣 天地の根源の氣。○文氣 文章にあ

らわれた気力。○点撥 文字の配置。ここでは、逍遙の詩についていう。○妥帖 ぴったりはまる。○節奏 詩のリズム。○鏗鏘 美しい響の形容。○追逐云々 賈董は前漢の賈誼と董仲舒。この表現、北宋・蘇軾の「潮州韓文公廟の碑」に「李杜を追逐し参はつて翱翔す」とあるのによる。○韓吏部 韓愈の最終官位が吏部侍郎であつたのでかく称す。○樹立 しつかりと立つ。○力回云々 倒瀾はくずれた波。韓愈の「進学解」に「狂瀾を既倒に廻らす」と。時勢の衰えたのを挽回する意。○彫虫技 ひとすらす字句を彫琢することを貶しめていう。○争樹云々 文場で主導権を握ろうとする。○瓦釜云々 『楚辞』卜居に「黄鐘は毀ち棄てられ、瓦釜は雷鳴し、讒人は高く張り、賢士は名無し」と。黄鐘は楽器で最もよく響くもの。大人物の喩。瓦釜は土製の飯釜。小人物の喩。○玄文云々 『楚辞』九章・懷沙に「玄文幽に処れば、矇瞶之を章らかならずと謂ふ」と。玄文は白地に墨で画いた模様。矇瞶は盲人。なお、処幽の二字、『史記』では幽処に作る。○大雅 『詩経』の分類の一。主に宮廷の饗宴に歌われ、周の天子の徳をたたえたものが多い。○嘆喟 嘆息。○風義 (りっぱな) 態度、様子。○鳳曆 曆の美称。中国古代、鳳は天時を知る鳥とされたからいう。○雁足 漢の蘇武の故事により雁は手紙を運ぶ鳥とされたのでかくいう。○穹蒼 蒼天。

以上、ながながと逍遙に唱和した高橋作衛とその父白山の詩を挙げて来たが、兩人の作はいずれも、逍遙の詩才を高く評価し、漢詩壇の現状を憂える逍遙に理解と共感とを示した内容となっている。なかでも高橋白山は、逍遙とは恐らく会ったこともなかったであろうが、まだ世に出る機会もなく焦慮するこの息子の友人に対して、『史記』や『論語』の言葉を引用しつつ中国古来の士人の生き方を説き輾轉不遇に耐える大丈夫の心がまえを諄々と論じている。その実これは、ちょうど今の逍遙と同じ年齢の頃、江戸で詩人達と交際し国事を論じながら家庭や藩内の事情で愛国の志士として周旋奔走す

ることかなわず、また維新後は中央に出ることもなく信州の地で子弟の教育に専念した老漢学者が自らを支えた信条を吐露したものと言えよう。

ただ、逍遙が高橋作衛に寄せた詩の冒頭、「妻を娶らば当に陰麗華の如かるべく、子を生まば願はくは孫仲謀に似んことを」と言い自らの恋の悩みを「銷魂種」と表現して仄めかしていることについては、高橋作衛も白山も何ら言及する所がない。もとより具体的な事情を知る由もない白山が触れぬのは当然ながら、作衛の方でも逍遙の恋についてたとえある程度まで察しがついていたとしても、直ちに云々することは憚られることでもあつたろう。かかる場合、黙しておくのが礼儀というものかも知れない。

しかし、逍遙にしてみれば、詩の形式を破つてまでも叫ばずにおれなかったのが冒頭の二句とりわけその首句であり、諦めようにも諦めきれない南条貞子への未練執着、そこから生ずる懊悩煩悶が「銷魂種」となつてわが身を苛んでいたのである。そうした逍遙からすれば、高橋父子が自分の詩才を認めその将来を期待してくれたことには大きな励ましを受けたとしても、己が胸中すべてを理解してくれているとは必ずしも思い難く、恋の悩みは打ち明けても詮ないことだと感じて、その意味では孤独感を内向させたのではなからうか。甚だ不十分ながら、この札記では、中野逍遙と高橋白山・月山父子との交流について、それぞれが応酬した詩を挙げ、感想の二・三を記したしだいである。

○張船山詩と高橋作衛

前稿『逍遙遺稿』札記——張船山のこと他——(「梶山女学園大

学研究論集」第二九号、一九九八年三月）において、清人張船山の詩が明治の若者たちに迎え入れられていたことを、中野逍遙・正岡子規・与謝野鉄幹の三人について検証したが、この度、『月山遺稿』を繙いてみて、若き日の高橋作衛にも張船山に次韻した詩があるのを知ったので、茲に紹介しておきたい。

それは「夜坐感有り。張船山の韻を用ふ」と題された七言律詩で、『月山遺稿』では中野逍遙に和した詩の前におかれており、詩中に「十年の志」ということからして、明治二十六年、作衛が二十七歳の時の作であろう。（◎は韻字。下平声庚韻）

節物催人魂易驚

節物 人を催して 魂 驚き易し

亨途如砥幾時平

亨途 砥の如く幾時にか平らかならん

燈前獨守十年志

燈前 独り守る十年の志

馬上誰馳萬里名

馬上 誰か馳せん万里の名

圖按東西觀地勢

図は東西を按じて地勢を觀

書窮今古到天明

書は今古を窮めて天明に到る

無端起見山頭月

端無くも起ちて見る山頭の月

不忍池邊落雁聲

不忍池辺 落雁の聲

この十年というものは国際政治の舞台で活躍することを夢みて、今日も明け方近くまで勉強に励んでいるのだが、空の白らむ気配にふと気づき、起ち上つて外をみると、上野の山に月が落ち不忍の池あたりからは雁の音が聞こえてきたという。なお、二句目の「亨途」は平坦な道、順境をいう語で、下文の「幾時平」と意味上しっくりこないように感じられる。それはともかく、この詩は次に示す張船山二十一歳の作「重ねて感有り」二首其一（和刻本『船山詩草』巻一、戊丁集）に次韻したものである。

伏櫪長鳴萬馬驚

伏櫪長鳴 万馬驚き

唾壺擊缺氣難平

唾壺撃ちて缺くとも氣平かなり難し

自甘縱酒逃風雅

自ら縦酒に甘んじて風雅に逃るるとも

不欲因人著姓名

人に因つて姓名を著すを欲せず

醉後春泥三逕滑

醉後 春泥 三逕滑り

夢回雪屋一燈明

夢回めて雪屋 一燈明かなり

拊牀忽憶劉琨語

牀を拊して忽ち憶ふ劉琨の語

莫道荒難是惡聲

道ふ莫かれ荒難は惡聲と

○伏櫪 魏曹操の「歩出夏門行」に「老驥櫪に伏するも、志は千里に在り。烈士暮年なるも、壯心已ます」と。驥は駿馬。櫪は厩舎のかいばおけ。○唾壺 東晋の王敦は酒を飲むといつも曹操の樂府（前出）を詠じ、如意で啖壺をうちながら節をとつたので、壺の口がすっかり缺けてしまったという（『世說新語』豪爽篇）。○縱酒 思う存分酒を飲む。○三逕 三徑と同じ。○拊牀 寢台をたたく。感情が昂つての動作。○劉琨 西晋の詩人。字は越石。○荒難 真夜中に鳴く鶏。不祥の兆とされた。祖狄が劉琨と一つふとんに寢ていた時、夜中に鶏の声が聞えると、劉琨を蹴り起こし、これは惡聲に非ずといつて、一緒に舞つたという（『晋書』祖狄伝）。本来ならば「劉琨語」というのはおかしいが、ここでは平仄のつごうもあつてかくいう。

ここには現実に対する不如意感を抱きつつもそれを払拭するような感慨が詠じられているが、この詩に限らず張船山の青年期の詩篇には豪宕なロマンチズムに溢れた作品が多く、そのため明治の漢学書生たちに共感を呼んだのである。若き高橋作衛もそうした政治的文学的浪漫者の一人であつた。

※なお、前稿には、次のような誤記の箇所があつたので、訂正させていただきます。

- 一三五頁下段十三行目 戊丁集（誤）戊丁集（正）
- 一三九頁上段十一行目 卷二、戊丁集―卷一、戊丁集
- 一三九頁下段十四行目 戊丁集―戊丁集

一三九頁下段二二行目 卷四―卷三
 一四〇頁上段十九行目 星淵―星衍
 一四〇頁上段十九行目 題す―詩を題す
 一四一頁下段十二行目 戊丁集―戊丁集
 一四二頁上段二五行目 戊丁集―戊丁集
 一四二頁下段三行目 戊丁集―戊丁集
 一四二頁下段五行目 己是 己に是れ―己是 己に是れ
 一四二頁下段六行目 卷三、戊巳集―卷二、戊巳集
 一四二頁下段十六行目 卷二、丙午集―卷一、戊丁集
 一四三頁下段一行目 題―書
 一四三頁下段七行目 なかったの―なかったのは、
 一四三頁下段八行目 交際が―その交友が
 一四三頁下段九行目 ことだと―ことではないかと
 一四三頁下段十二行目 題す―書す
 一四四頁下段八行目 題す―書す

この他、中国で刊行された張船山詩の選注には、前稿で挙げたもの以外に、趙雲中等選注『張問陶詩選注』（四川文藝出版社、一九八五年）があることを知ったので、参考までに付け加えておく。

注

- (1) 川崎宏「中野逍遙の詩とその生涯―夭折の浪漫詩人―」（愛媛県文化振興財団、一九九六年三月）。更に、高橋白山の子、作衛と中野逍遙との交流については、既に村山吉廣「中野逍遙について（一）―逍遙周辺の人々―」（『東洋文学研究』第十八号、一九七〇年三月）にも言及されている。
- (2) 『白山文集』に載せられた依田学海（（天保四三）（明治四九））の紋に「先師藤森天山先生、以三經濟文章、名聞天下。門下多三傑士。而川田益江、鷺津穀堂其選也。文久癸亥歲、高遠藩士高橋白山、來三江戸、价三穀堂謁三先生、執三贊而為三弟子」という。但し、鹽江川田剛（（天保五）（明治六））の「天山藤森先生墓表」（『事実文編』卷六九）及び望月茂『藤森天山』（藤森天山先生顕彰会、昭和十一年刊）に拠れ

ば天山は文久二年壬戌に歿しており、癸亥歳とは一年のずれがあるのだが、その消息については不明。
 なお、『日本漢文学大事典』や『漢文学者総覧』に、白山が坂本天山（（七四五）（一八〇三））に師事した如く書かれているのは、誤まりであろう。

- (3) 三浦叶『明治漢文学史』（汲古書院、一九九八年五月）の附録「明治年間における漢詩文集年表」参照。ちなみに同書中編第二章「日清戦争と漢詩」に「征清詩史」が、同じく第十章「異色な漢詩文集」に「経子史千絶」が取り上げられている。なお、木下彪編『明治大正名詩選（後編）』（『漢詩大講座』第十卷、アトリエ社、一九三七年）には白山の詩八首が収録され、近年中国で刊行された『日本漢詩摘英』にも五首を採る。

- (4) 『月山遺稿』巻上に「與丁汝昌勸降書」を収める。

- (5) 中野逍遙と穂積家との関係については、川崎宏前掲書参照。

- (6) 『月山遺稿』の凡例に「博士幼受學於家庭。嚴父白山先生日課詩十數首、年甫十三歳、命屬漢文」という。

- (7) 例えば、法科大学在学中の明治二十六年四月には、「祭帝國大學講師越氏文」を書いてゐる。越氏は、財政学を担当したエッケルトのこと。

- (8) 川崎宏前掲書参照。

- (9) 「上毛漫筆」（外編）。

- (10) 「豆州漫筆」（正編）に「先年心を病み、而して鼓動時に激す。客歳熱を憂ひ、而して神氣益々銷す。（中略）遂に自愛の心を發し、湘南卅里の游を作す。蓋し風流水山の勝に託する者に非ず。僅かに旦夕の病を救ふに補效せんと期する耳」という。この時、修善寺から熱海に入ったのが一月二日。それからほぼ一ヶ月露木樓に滞在したようだ。

- (11) 中野逍遙が島田篁村・副島蒼海の二人を高く評価していたことについては、既に原田憲雄「中野逍遙」（『人文論叢』第二十四号、一九七六年）に論じられている。また、草森紳一「秋霜に傲る 副島種臣の生地佐賀に旅して」（『墨』一九八三年三月号。後、『北狐の足跡』所収）には逍遙と蒼海との関わりについて、両者が会ったこ

とがあるかどうかはわからぬが、逍遙は蒼海が最も親しかった中国人で文科大学の講師でもあった張滋昉から「蒼海と応酬した詩を見せられ、彼の生き方までを教えられたのであらう」と述べる。

- (12) 中野逍遙より三歳年下の臨風笹川種郎は、国史料の出で昭和四年の岩波文庫版『逍遙遺稿』に訳文(訓読文)に附した人だが、昭和二十一年刊の『明治還魂紙』(現在、筑摩明治文学全集に収む)の中で、島田篁村について次の如く回想している。

「漢籍講讀の雄は篁村島田重禮先生を推して第一としなければならぬ。先生學深く識高く、如何なる難解の文意も一たび先生の解釋を経れば、坦々として大道の如きものであつた。私が大學にゐた時、先生の講義があると各科を通じて之を聴講した。『楚辭』天問の篇の如き、古來解し難いものとされてゐたが、先生が之を講ずると、庖丁牛を解くに似て、刃を迎へて皆釋かれるのであつた。」

「竹添井々先生の支那史はまことにつまらなかつたし、鐵扇片手の根本通明先生の論語は敬遠してついに聴かず、漢學は島田先生ばかりを聴いて歩いた。」

もつとも、当時哲学科の選科生であつた西田幾多郎からみれば、「この高名な漢學者は、教壇に上るや、やおら腰から煙草入れをとりだし、おもむろに一服ふかしてから、やつと講義にとりかかる。しかしその講義たるや、ただ莊子を音吐朗々、読みあげるだけなのであつた」(竹田篤司『西田幾多郎』中公叢書、一九七九年三月)といふことになるのだが、篁村に心酔してゐた逍遙の場合は、臨風と同様の感想を抱いたに違ひない。なお篁村については、町田三郎『明治の漢學者たち』(研文出版、一九九八年一月)にその学問の一斑が考察されている。

- (13) 森槐南の詩風については、入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』第一章(研文出版、一九八九年二月)に論じられている。

- (14) これは、大町桂月・田岡嶺雲にも共通する見方であつた。桂月の『逍遙遺稿を讀む』(帝國文學)明治二十八年第十二号)に、
「今の詩人たるものは、徒に詞を弄するのみ。措辭愈妙を極はめて、氣愈餒ゆ。人形の如く、造花の如し。毫も生色あるを見ず。」

五斗米の爲に腰を屈するは怪しむに足らざれど、權に媚ひ、世に阿り、胸中一片の赤誠なく、國家の何物たるを解せず、美の何物たるをも解せず、血なく、涙なく、徒に支那人の口眞似して、陳腐相襲ぎ、浮華輕佻、人をして嘔吐を催さしめむとす。」

と、「槐南一輩」を念頭をおいて手厳しく批判している。嶺雲については、拙稿『逍遙遺稿』札記「故郷の恋人のこと他」(『椋山女学園大学短期大学部二十周年記念論集』一九八九年十二月)の中で言及した。

- (15) 「麗花鬪草、顛倒相尚ぶの弊」というのは、中唐・李翱の「吏部韓侍郎を祭る文」に「建武以還、文卑しく質衰はれ、氣萎え體敗れ、剽剥譲らず。花を儷べ草を鬪はし、顛倒相上ぶ」という美文否定論の一節に基く表現。また、「之を思ふも益無し、學ぶに如かず」は、「論語」衛靈公篇に見える言い方。

- (16) 佐佐木信綱『明治大正昭和の人々』(新樹社、一九六一年一月)。なお、これは既に村山吉廣前掲論文に紹介されている。

- (17) 三浦叶前掲書、下篇第五章「明治の文人と漢文學」に、森田思軒(文豪一八八七)が「一時期張船山詩を愛好した旨、指摘されている。それに拠れば、思軒は十九歳(明治十二年)の頃には張船山の韻に庚和した作が少くなかつたが、その後十年振りにその集を見て、頗る望みを失つた」という。それは「船山の詩は爽朗快豁な趣はあるけれども含蓄に乏しく、餘韻に乏しく、たいいてい高聲壯語、戟呼喝破するのみ」であつた為で、「嘗て喜んで誦した『佛前の飲酒告然』として得る有り」の如きも、均しくまたこれ物である」と否定的な言辭を連ねている。

けれど、思軒の指摘は張船山の青年期の作についてはあてはまるが、逆にそれ故にこそ明治の若者たちに受け彼らにアピールしたのではあるまいか。思軒が例に挙げた「仏前の飲酒浩然」として得る有り」と題された詩は、正岡子規も大学時代のノートにその一節を書き写してゐたのである。

(一九九八・九・一八)

〔補記〕

この札記を脱稿後、高橋白山に関する論考として、名倉英三郎「研成学校記 教員白山高橋敬十郎」（『比較文化』第十一号、一九六五年）があるのを知った。かつて黒頭巾こと横山健堂は『舊藩と新人物』（敬文館書店、明治四十四年九月）の中で、

◎高橋白山は、其門下、信州無數の新人物を輩出せしむ。佐久間象山は、學問識見を以て、天下の士と爲る。白山は、則ち一の中等教員に終れりと雖も、其の教育に貢献したるの功は、必ずしも、象山に下らず。

と述べているが、同論考は教育者白山について明治八年頃までの足跡を丹念に辿り、研成学校との関わりを論じたものであることを、最後に書き加えておく。

（一九九八・九・二二）